

平成十九年はいわゆる「偽装問題」が世間を不安にさせました。とくに食物という誰もが安全への信頼を前提にしていることだけに深刻な問題といえます。なかでも安い肉を高級な肉として偽装した、老舗の料理屋と、売れ残りの餡を使用して、新しく賞味期限を付け替えた、これまた老舗の和菓子店が印象的でした。ところで、この事件には異質な問題が内在しているように思われます。肉の偽造はまさに「だまし」にもとづくものでしたが、和菓子の場合は、売れ残った餡を「もったいない」という理由から行われた「うそ」でした。以前は砂糖を多量に使用する餡は高級品でした。おそらく古来から伝わってきた製造方法のなかに、捨てずに使用する技法があったかと思われまます。その伝統を重んじているうちに、現代社会のルールとして、食品に関する多くの法律に賞味期限の提示が定められ、結果として違法な行為になったのではないかとみることとも出来ます。古い体質が社会の変化に鈍感であり、法律を無視した結果であり、けして和菓子店に責任が無かったと言うつもりはありません。ただここで考えさせられるのは、今後こうした事件によって、信頼関係を問題とする範疇が各方面に広がるのではないか、ということです。今回の事件は食品の衛生管理に関することで、表示という客観的にその「偽」が指摘しやすい、だれもが共通した認識をもてた事柄でしたが、客観的に見えにくい、たとえば布教教化といった場面ではどのようなことが起

こるか、ということです。

もちろん現在では憲法によつて信教の自由がうたわれています。しかし、社会のルールとしての宗教法人法は、オーム真理教事件以後、改正と称して宗教活動にいくつもの条件が課せられました。宗教法人に登録されている寺院などは規模の大小にかかわらずすべてが、毎年所管庁への役員名簿と財産目録の提示が義務づけられました。怠ると罰金が科せられます。宗教法人の新設はかなり手続きが難しくなっています。ある事件やそれに伴う世論に応じて、ほんの一部の対象であつたはずの問題が、法律として例外なく対象化しているのです。もともと日蓮宗は七十五年の歴史がありますが、制度としては明治以降の創立となっています。つまり、現在の宗門や各寺院などは伝統にもとづく信仰の世界と、制度による組織との二重構造となっているといえます。ここで問題にしたいのは、この構造を構成する両者の区別が曖昧になりつつあるということです。教義について考えてみると、宗祖日蓮聖人の教えをはじめとする教義や、その寺の縁起などによる信仰の歴史があります。一方では明治以降に日本に導入された欧米の学問方法によつて教義が学問として蓄積され、さらには現代社会の問題に対応する必要から、一部では教義の見直しが行われてきました。このことは現代に通じる教義の追求として必要なことではありませんが、長年培ってきた信仰に関する教義や布教方法を不用とするものではありません。しかるに、明治以降の学問方法や価値観が大前提となつた現在の日本の社会では、従来の伝統的なものもつ意味合いが大分少なくなりました。それは仏教の世界でも例外ではなく、宗門の教育体制でもその影響下に置かれていません。『立正安国論』を前面にだすべきではない、などの議論がされている現実がそれをま

たっています。それは伝統として受け継がれ、これからも伝えてゆかなければならない事柄と、後から付加されて、その対応が必要となった事柄との区別が曖昧になっている証拠といえます。そこで問題なのは、曖昧になることよって、すべてを明治以降の価値観で位置づけてしまい、教義以外の布教のあり方などという教化に対する姿勢までも、現代社会のルールに影響されて制度化されてしまう恐れがあるからです。その前兆として次のような主張を紹介します。これは疑似科学について述べられた論文の中で、宗教にも本物と疑似があるという問題について言及した部分です。

本来の宗教とは、心の迷いを取り除き、個人の内面を安心立命した心境に導く教えのことである。そのため、神とか仏とかの超越的絶対者を仮想し、その絶対者が指し示す神聖な法（教え）に帰依することを要請する。（中略）そして、あくまで祈りや願いが個人のレベルで閉じていることが宗教の存立条件になる。他者の存在には関係なく、自己の確立が究極の目的なのである。心のゆらぎを小さくし、未来への不安感を軽減することにより、現実を生きる上での勇気を培って人生の励ましとなるのが宗教の本来の役割だろう。

（池内 了 著 『疑似科学入門』 岩波新書より）

現代の僧侶のなかにもこうした宗教観を肯定する人が多くいるのではないかと思えます。以前に、ある研修会で「靈山浄土」について述べたときに、参加者の僧侶から「本当に靈山浄土を信じているのですか」との質問をうけて、驚きと戸惑いをおぼえたことがありますが、決して冗談話ではなさそうです。今の引用は学者の個人的見解ではありますが、こうした宗

---

教観が多くの人々に受け止められたときに、社会のルールとして宗教活動が規定される時代がくるのかもしれない。変わらずに守るべきものと、変わらざるを得ないものとの区別を我々宗教に携わるものがしっかりと見定めなければならぬと思います。これこそが教化学の基本課題だと思います。